

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19710213

研究課題名（和文）レバノン・ヒズブッラーの思想と活動に関する実証研究

研究課題名（英文）Political Thoughts and Activities of Hizballah in Lebanon

研究代表者

末近 浩太（SUECHIKA KOTA）

立命館大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：70434701

研究成果の概要

本研究の目的は、レバノンのシーア派イスラーム組織ヒズブッラー（ヒズボラ）の思想と活動を実証的に調査・研究することである。具体的には、1年目に主に思想的側面を、2年目に組織構造および活動の分析を試みた。アラビア語原典資料の収集と分析を通して、特に近年のヒズブッラーの行動論理を明らかにすると共に、2度のフィールドワーク（レバノン、イラン）の成果によりこれまでほとんど知られてこなかったその社会活動および資金の流れに関する一定の知見を得ることができた。ヒズブッラーは現代世界において最も成功しているイスラーム運動の1つである。したがって、本研究で得られた成果は、ヒズブッラーの実態解明だけではなく、イスラーム運動一般を論じる際にも多くの示唆を与えるものとなる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	180,000	1,380,000

研究分野：地域研究，国際関係論，政治学，宗教学，思想史

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：イスラーム、安全保障、テロリズム

1. 研究開始当初の背景

2006年夏のレバノン紛争を契機に、ヒズブッラーは国内・地域・国際政治の3つのレベル、すなわちレバノン内政と中東和平の文

脈のみならず、中東全体の政治的帰趨を左右する重要なアクターの1つとなった。申請者は、現在までの約10年間、無数のイスラーム運動のなかでの数少ない「成功例」の1つとして、そしてレバノン、シリア、イラン、

パレスチナ/イスラエル、米国の政治的思惑の交差する点 「中東政治の結節点」と位置づけ、その動向を主に比較政治学と国際政治学の2つの角度から調査・研究してきた

2. 研究の目的

本研究では、上記の成果を発展させるべく、これまで直接研究対象としなかったヒズブッラー自体の調査・研究を行うこととし、特にその思想と活動の実証研究を進めることを目的とした。

3. 研究の方法

アラビア語原典の解析を通して、ヒズブッラーがいかなる思想とイデオロギーを有し、また、それを変容させてきたのかを解明する。特に、精神的指導者と言われた M. H. ファドルッラーの思想、具体的には(a)「殉教(自爆)攻撃」と(b)「政党活動」の2つの概念を取り上げた。

フィールドワークを通して、ヒズブッラーの組織としての実態を把握・分析する。具体的には、(a)カリスマ的な人気を誇る H. ナスルッラー書記長の陰に隠れている幹部たちの素顔と組織の構造、(b)長年展開してきた福祉・医療・教育活動、教育の規模と資金源、(c)法案を中心とした政党活動の実態の解明に努めた。

4. 研究成果

ヒズブッラーの広報資料の収集および現地調査を通して、その政治・社会活動の実態を一定程度描き出すことに成功した。特に社会活動については、2006年のレバノン紛争にて壊滅的な打撃を受けたものの、イランからの精神的・物理的支援により急速に再編

および拡大が進んでいることが明らかになった。

精神的指導者と言われたファドルッラーの役割について、主に現地調査および原典解析を通して解明した。その結果、今日ファドルッラーはヒズブッラーの意志決定にほとんど関与していないことが明らかになった。

H. ナスルッラー書記長ら幹部の言説を解析し、近年におけるヒズブッラーの行動論理を分析した。そこでは、イスラームに立脚した(革命的)政治理念とレバノン・ナショナリズムを橋渡しするような思想的展開が看取された。書記長の重要な演説の1つ、「勝利演説」については、アラビア語から全訳し刊行した。

ヒズブッラーが掲げる「シーア派」が、今日のレバノン社会においていかなる意味を持つのかを精査した。特にレバノン・ナショナリズムとの関係を補助線とすることで、ヒズブッラーが実質的にある種の「政教分離」を行っていることが明らかになった。

近年のヒズブッラーの思想と活動の実態把握は、レバノン政治および域内政治のメカニズムを読み解くための大きな鍵になることが明らかになった。具体的には、レバノンとシリアの両国を1つの「政治構造」とする政治分析の枠組みの可能性を提示した。その成果は、青山弘之との共著の報告書(資料集)および単行本にまとめられた。

ヒズブッラーをはじめとする今日のイスラーム主義運動が提起する「価値」と「世界観」を国際政治という広い文脈でどのように位置づけるか、方法論的な検討を行った。欧米で発展してきた政治学や国際関係学が前提とするウェストファリア的な枠組みを再検討する必要性が明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

末近浩太「『9.11』後の国際政治におけるイスラーム：認知論的再考」『二十世紀研究』第8号, 2007年, pp. 1-18, 査読有.

末近浩太「アラブ諸国における宗教とナショナリズム：レバノンの宗派主義体制の事例から」『立命館国際研究』第21巻, 第1号, 2008年6月, pp. 19-38, 査読無.

[学会発表](計 1 件)

末近浩太「アラブ諸国における宗教とナショナリズム：レバノンの宗派主義体制の事例から」(部会7「民族紛争における宗教の位相」日本国際政治学会2007年度研究大会(2007年10月27日 福岡国際会議場)).

[図書](計 3 件)

末近浩太「グローバリゼーションと国際政治(2):『イスラーム』の『外部性』をめぐって」大久保史朗編『グローバリゼーションと人間の安全保障』(講座 人間の安全保障と国際犯罪組織 第1巻), 日本評論社, 2007年, pp. 73-94.

末近浩太『現代シリア・レバノンの政治構造』(アジア経済研究所叢書5)岩波書店, 2009年(青山弘之との共著), 278 pp.

末近浩太「中東におけるリージョナリズム」篠田武司・西口清勝・松下冽編著『グローバル化とリージョナリズム』(シリーズ グローバル化の現代:現状と課題 第 巻)御茶ノ水書房, 2009年, pp. 299-325.

[その他]

翻訳：末近浩太「ヒズブッラーのレジスタンス思想：ハサン・ナスルッラー『勝利演説』」『イスラーム世界研究』第1巻, 第1号, 2007年, pp. 150-171.

翻訳：末近浩太「シリア・イスラーム革命宣言および綱領」『イスラーム世界研究』第2巻, 第1号, 2008年, pp. 257-270.

青山弘之編/青山弘之・末近浩太著『現代レヴァント諸国の政治構造とその相関関係(調査研究報告書)』JETROアジア経済研究所, 2007年3月, 161 pp.

末近浩太編『現代中東政治学リーディングガイド(Cias Discussion Paper No.6)』京都大学地域研究統合情報センター, 2008年3月, 103 pp.

末近浩太「『越境』するレバノン内政：『政治構造』の分析に向けて」立命館大学国際地域研究所「途上国における『非伝統的暴力』と下からのシナジー型民主的ガヴァナンス」(2007年4月26日 立命館大学).

末近浩太「レバノンの政治構造」京都大学地域研究統合情報センター「現代中東における国家運営メカニズムの実証的研究と地域間比較」とアジア経済研究所「現代レヴァント諸国の政治構造とその相関関係」の共催(2007年6月8日 東京外国語大学本郷サテライト).

末近浩太「国際政治におけるイスラーム：認知論的再考」京都大学文学部現代史学研究室創設40周年記念シンポジウム「『9.11』から6年：事件とその後の世界をどのように考えるか」(2007年7月21日 京都大学).

末近浩太「レバノンにおける民主主義とナショナリズム：ヒズブッラーの言説を中心に」慶應大学21COE-CCC, 市民意識比較研究カンファレンス(市民意識比較研究サブユニット) (2007年7月28日 慶應大学).

末近浩太「現代中東における国民国家・ナショナリズム・宗教：レバノン内戦とその後の『国家』建設の事例から」G-COE生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点・第6回「次世代の地域研究」研究会(2008年3月17日 京都大学).

末近浩太「レバノン・ヒズブッラーの組織構造と社会活動の実態」NIHUプログラム・イスラーム地域研究・早稲田拠点・研究グループ2「アジア・ムスリムのネットワーク」研究班3「イスラームとNGO」研究会

(2008年6月15日 早稲田大学)。

末近浩太「レバノン・イスラエル国境における『恐怖の均衡』とその動揺：2006年『レバノン紛争』を事例として」科学研究費補助金基盤研究A「湾岸産油国を中心とする中東の予防外交の可能性に関する研究」(2008年8月24日 仙台・ホテル華乃湯)。

末近浩太「パレスチナ問題と21世紀の中東政治」西宮東高校開放講座，木曜講座(「自爆テロの陰で：イスラーム政治と現代世界」)(2007年11月15日 なるお文化ホール)。

末近浩太「ヒズブッラーとは何か：イスラーム運動とシリア・レバノン政治」(国際交流基金・異文化理解講座「シリアとレバノンで何が起きているのか：中東地域情勢の意味に迫る」第8回講義)(2007年12月5日 国際交流基金)。

末近浩太「イスラーム主義過激派の勢力の台頭とその背景」(ひょうご震災記念21世紀研究機構・ひょうご講座「中東問題とイスラームへの理解を深める」第9回講義)(2008年11月11日 兵庫県民会館)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

末近 浩太 (SUECHIKA KOTA)
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：70434701

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者